

「早く」(形容詞連用形)の方言分布

— 中部日本地方域の方言について —

江 端 義 夫
(1987年9月10日受理)

The Distribution of the HAYAKU
— On the Dialect of the Chūbu Area in JAPAN —

Yoshio Ebata

We have tried to interpret the distribution of the HAYAKU, a continuous form of an adjective, in the Chūbu Area dialect in Japan by using the linguistic geographical method.

The results :

- 1) The contrastive distributions between the HAYAKU and the HAYŌ are roughly as same as the KŌGOHŌBUNPUZU. That have not changed much since 39th Meiji era.
- 2) The HAYŌ, which has influenced wide, seems to be older than the HAYAKU in the Chūbu Area.
- 3) Euphonic changes of the HAYŌ have distributed over westside of the border-line between Niigata prefecture and Toyohashi city.
- 4) Both the SHIROKU and the SHIRŌ at Meiji era coexisted in the middle-south parts of Aichi prefecture. But the SHIRŌ only are distinctive now.
- 5) Not so remarkable changes of the euphonic distribution between the aged and youth can be seen. But the NUKUTANAI are increezing gradually.

○ はじめに

日本の中部地方において、形容詞の連用形「早く」が動詞に上接して連用修飾の位置にある場合、日常会話場面で、どのような音訛現象が見られるか、またそれらの言語現象にどのような歴史的推移が推定されるかについて考察したい。(但し、後に掲げる方言分布図には、「早く」の未調査地点が、静岡県・石川県地方にかなり多く見られる。この調査項目は、調査の初期には項目に入れていなかった。調査を始めてから、この項目が必要であることに気付き、追加した。したがって、初めの頃に調査が済んでいる地点では、「早く」が未調査になっている。)

一、「日本大文典」から「口語法分布図」まで

はじめに、ロドリゲスの「日本大文典」に基づいて、「早く」などの形容詞連用形の音訛状況が、全国的に

どのようなであったのかを、検討してみよう。

1604年にジョアン・ロドリゲスが編纂したその本には、「関東又は坂東」地方の発音の特色について、次のように記してある。

○Ay (アイ), Ey (エイ), Iy (イイ), Oy (オイ), Vy (ウイ) に終る形容動詞において, Yō (良う), Amō (甘う), Nurū (緩う) などの如く, Ō (おう), Ō (アう), Ū (ウう) に終る語根の代りに, Xiroqu (白く), Nagaqu (長く), Mijjaqu (短く) などの如く書き言葉の Qu (く) に終る形を用ゐる。(『日本大文典』昭和30年3月, 612頁~613頁)

したがって上の記述によれば、①近畿地方や若狭地方、五畿内よりも東の地方、いわば東日本地方では、形容詞の連用形に開合の別がないこと、また、②語末が、書き言葉の Qu (く) に終わること、の二点が指摘されている。これは、簡略ではあるが、鋭い観察力に貫かれた記述である。しかも、事実が的確にとらえられている。

今度は、この「日本大文典」の記述を、明治39年(1906年)刊行の「口語法分布図」の分布と比較してみよう。

明治の国語調査委員会が編纂した「口語法分布図」には、第27図に、形容詞連用形の全国分布図がある。「二十七「広くなる」「大きくない」「広うなる」「大きくない」等ノ分布図」とある。この分布図には、形容詞「広い」と「大きい」の肯定連用形と否定連用形との音相が、同時に地図化してある。これを、「ウ語尾」対「ク語尾」の対立として調整し、地図化しなおしてみた。それが図1である。

図1の分布は、概略、次のようになっている。まず、「ヒロク」と「ヒーロー」との境界が、新潟県内で複雑に入り組んでいる。また、富山県と長野県との境、岐阜県と長野県との境が、明瞭に2つの事象の境界になっている。ところで、また、愛知県内でも、新潟県内と同様に複雑な分布様相が見られる。

そこで次に、もう少し詳しく分布をたどってみることにしたい。

新潟県について、「口語法調査報告書(下)」で分布状況を確認してみれば、次のとおりである。

- 広く……(古志, 南魚沼, 中魚沼, 刈羽, 東頸城, 中頸城)
- ひろー……(新潟市, 西蒲原, 北魚沼, 西頸城, 佐渡)
- 広う……(北蒲原, 中蒲原, 南蒲原, 古志, 刈羽, 西頸城, 岩船) <下線は筆者による>

したがって、日本海沿岸では、新潟県中央部にある「古志」「刈羽」地域に、「ヒロク」と「ヒーロー」との両方が併存している。そして、その南部に「ヒロク」が分布し、南西部と北東部とに「ヒーロー」が分布するということになる。

翻って、他の事象分布との対応を考えてみよう。形容詞連用形の分布は、新潟県内においては、ワ行四段動詞「買って」の分布相と、比較的よく似ている。しかし、「コーテ」(買って)が、中部地方では北陸地方にだけ分布して、岐阜県や愛知県に分布していなかったのに対して、「ヒーロー」(形容詞連用形)は、北陸地方だけでなく、もう少し広く分布する点が注目される。

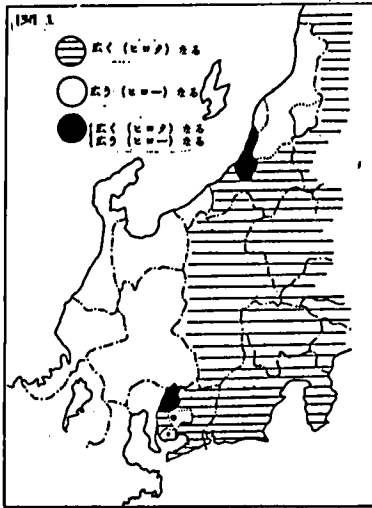
つまり、**岐阜県**全域にも、「ヒーロー」が見られる。逆に言えば、岐阜県域では、「ヒロク」の存しない点が、きわだった特色になっているのである。

愛知県内のウ音便(広う)は、次の地域で行われている(明治39年当時の行政区画名による)。

尾張国西部, 三河国西南部, 名古屋市, 愛知県, 東春日井郡, 布袋地方, 犬山地方, 羽黒地方, 穂波地方, 三重島地方, 一ノ宮地方, 海東部, 津島地方, 海西部, 師崎地方, 幡豆郡, 岡崎地方, 額田郡, 西加茂郡, 足助地方

これらの分布状況から判断すると、尾張地方では、古くは、「ヒーロー」のようにウ音便の行われていたことが分かる。そして、現在の瀬戸市域と岡崎市域、三河西南部周辺に、「ヒロク」と「ヒロク」との併存地域が、残存するのである。

すなわち、ウ音便の東限は、三河であるということが言える。その点では、ロドリゲスが三河より東を「坂東又は関東」と言っていて、そこにQu(く)で終わる言い方が行われていると指摘したことは正しかった。室町のころの状況と、明治39年のそれとが、かなりよく似通っていると考えてよい。



二、中部地方方言における「早く」(形容詞連用形)の分布について

以下では、1976年当時における中部地方方言の分布状況について考えてみよう。

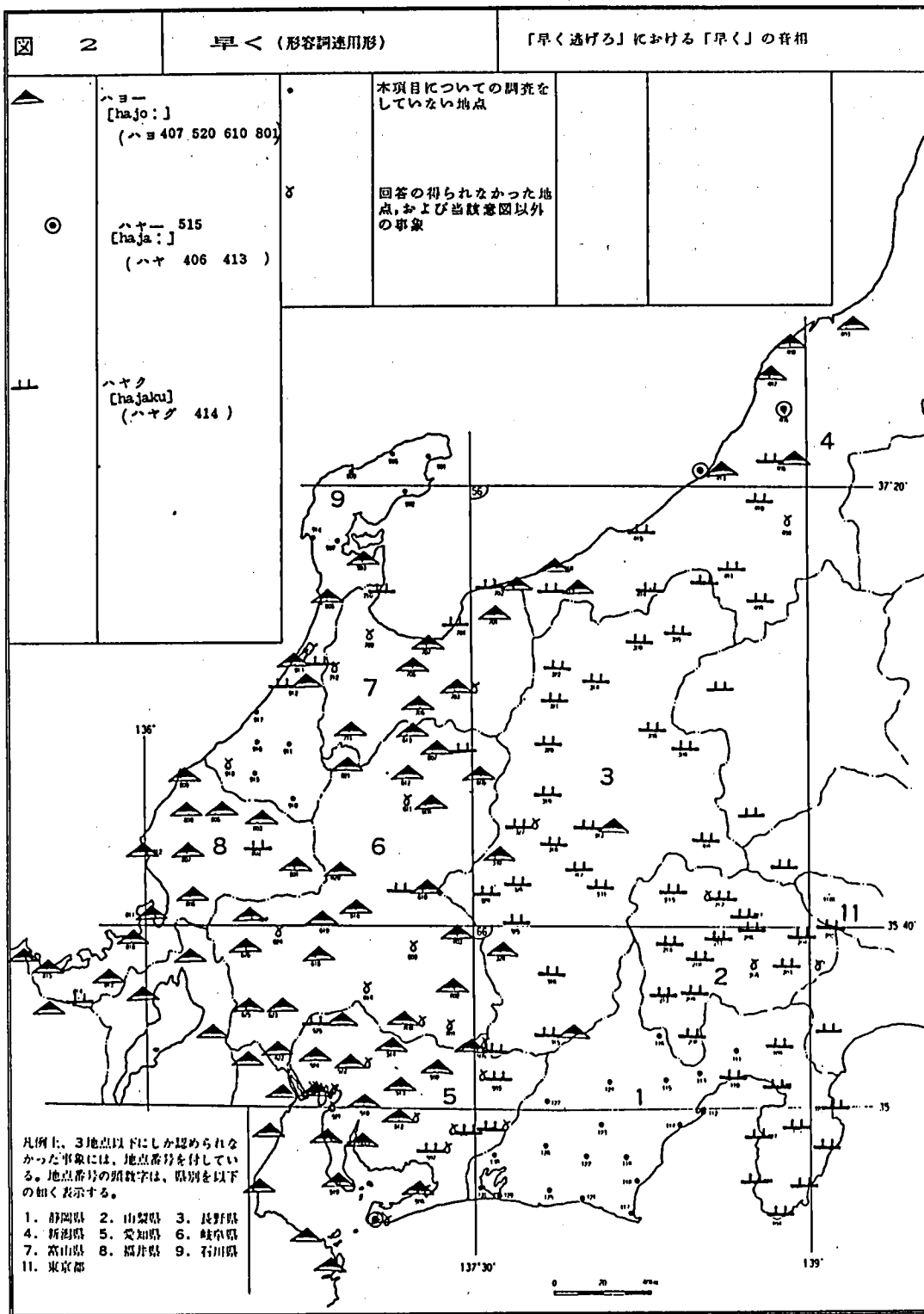
図2は、「早く逃げる」の文脈で、形容詞連用形「早く」が、接続助詞の「テ」を介さずに、直接に動詞に続く場合の音便現象を問題としている。

ここでは、「早く」と「早くて」との間に存在するかもしれない音便の程度差についての関心は薄い。むしろ、形容詞連用形の代表として「早く」を選択したのである。「早く」のウ音便化がどのように行われるかに、注意を寄せている。

もっとも、「赤く」「白く」「ねむく」「痛く」など沢山の形容詞がある中で、なぜ「早く」がとりたてられたかについては、「早く」が生活に密着した語であることに依るのである。日常生活に馴染みの深い語であるために、一日に一度は使わないではおられない。その語の音便の様相を尋ねることは自然である。

(一) 東西対立分布

「早く」の分布図には、明瞭な東と西との分布対立が見られる。「ハヨー」が、福井県、石川県、岐阜県、富山県の全域に分布している。新潟県の北部と南西部にも、「ハヨー」がある。魚沼郡や頸城郡あたりには、



「ハヤク」が介在しており、「ハヨー」の分布は途中で分断されている恰好である。

太平洋側の愛知県では、東三河地方が「ハヤク」であり、西三河や尾張地方には「ハヨー」が強力に分布している。もう一つ注目されるのは、長野県内のあちこちに、「ハヨー」が散在的に認められることである。

富山県の東部では、「ハヤク」に勢いが見られ、北陸地方とは言えども、決して「ハヨー」一色の分布にはなっていない。岐阜県、愛知県と北陸4県とを一つの組みにして、中部地方の西半域とすれば、ここに、「ハヨー」の分布が中核的な事象として、おさまりのよい状態で存することを、認めることは容易である。

ちなみに、佐藤虎男氏がなされた大阪弁の調査(1986年)によれば、形容詞のウ音便に関して、若年層者の使用は少ないけれども、大阪生まれの一般社会人は、57.8%が、それを使用すると回答しているという。氏も指摘しておられるように、自然会話資料であれば、もっと高率に成ったことは明らかである。ウ音便は、関西言語圏の特徴的な方言指標の一つとして抽出することのできるものなのである。

そのように考えると、上述の「ハヨー」が分布する中部地方の西半域は、西日本的な言い方に親しんでいると解することが可能である。

さて、図2を見るかぎり、新潟県の糸魚川を越えて、東方の新潟市の方にまで「ハヨー」が分布する。もはや「早く」は、厳密な意味において、明治の国語調査委員会が規定した「糸魚川・浜名湖線」を説明しうる適切な項目だとは言えない。

実際に、「ハヨー」は新潟県の北の果てにまで、見られるからである。

○ハヨー ニゲロー。早く逃げろ。54歳女教示。新潟県岩船郡山北町荒川, 1980。

○ハヨ イゲ。ハヨ イゲ。早く行け。早く行け。57歳女教示。新潟県岩船郡山北町大毎, 1980。

このように、西日本の方言の特色であるところの、「ハヨー」が、中部地方の日本海側の、かなり東のほうで盛んに行われていることに、興味を抱かざるをえない。

(二) 牛山初男氏「東西方言の境界」における「白く、白う」の分布

牛山氏は、国語調査委員会の調査が終わった50年後に、検証調査を行った。その結果、50年程前とほとんど変わらない方言分布状況が見られることを、次のように報告しておられる。

「白く」の西限は北は新潟県の中蒲原、東蒲原の郡境より北魚沼、南魚沼、中魚沼、東頸城の北境を

中断し、西頸城と長野県境を経て、長野県北安曇、南安曇、東筑摩、西筑摩、下伊那の各郡の西境より愛知県の北設楽、南設楽の西境を経て飯宝郡の北境を連ねる線が、純粹に白くを使用する線である。」(「東西方言の境界」6頁, 昭和44年)

氏は境界線と言う考え方で、とらえておられる。それはともかくとして、「白く、白う」の分布が、半世紀を経ても、微動こそすれ、大局的には不動であったということは、きわめて興味深いことである。

同書の巻末に「白く、白う」の分布図が添付されている。筆者の臨地調査によって作成した図2と牛山氏の図を重ね合わせてみた。氏の図には、北陸3県(福井、石川、富山)が含まれていないが、そこを「白う」の分布地域と仮定してみる。すると、牛山氏の図と筆者の図とは、非常によく重なり合うことが分かる。

ただし、牛山氏の「白く、白う」の分布図で、愛知県西三河地方に著しい分布を示した「白く」と「白う」との併存状況が、筆者の図では、ウ音便の「早う」の方に統一されていることを、指摘しておかねばならない。そしてまた、ウ音便化は、更に、渥美半島にまで伝播しており、共通語化の方角とは反対に、西から東への言語動向が見られることも、付言しておかなければならない。

氏は「ウ」と「ク」との混用が多い地域として、富山県、岐阜県、愛知県を掲げておられる。また三重県について、分布図で確かめてみると、「白う」の全体的な分布の中に、「白く」が各地で分散的に、かつ広範に分布しているようである。特に富山県と愛知県では、岐阜県の場合よりも、「白く」の分布量が多い。

次に、形容詞連用形の分布が、単語ごとに少しずつ違うことを、馬瀬良雄氏が報告しておられる。それを追認してみることにする。

(三) 馬瀬良雄氏「信州の方言」における形容詞連用形の分布

氏は、長野県の方言について詳しく調査され、上の本の中で、「赤く(なる)」、「早く(来た)」、「よく(来た)」の3項目についての分布図を掲げておられる。まず、「赤く(なる)」の分布図には、「アコー」の分布がほとんどなく、奈川村に若干見られるだけである。ところが、「早く(来た)」の分布図には、「ハヨー」「ハヨ」の分布が、木曾地方の南部で、17地点ぐらい、飯田地方で10地点ぐらいに増している。そして、「よく(来た)」では、木曾谷、伊那谷、飯田地方で、「ヨー」が「ヨク」をはるかに抜いて、5対2ぐらいの優勢さで分布している。

馬瀬氏のご指摘で貴重な点は、単語ごとに、それぞ

れに分布が相違することを、文法現象について具体的に示されたところにある。語ごとに分布があることは、言語地理学の常識でもあるわけだが、特定の文法現象に限って、相互の分布相について論じたものは、多くない。その意味において、解釈はさておき、三つの形容詞連用形の分布領域の明らかな違いが示されたことは興味深い。

形容詞相互の分布差の原因には、「赤く」と「早く」と「良く」とのそれぞれにおける語音環境のあり方やそれらの語が生活の中で使用される度合の問題、また、「さようなら、お早う、ようこそ」などとの類推の問題が作用しているのかもしれない。語彙の分布ほどに大きな違いはなくても、「形容詞のウ音便現象」として一括できない個別性が、3語の間にはある。そういう個別性が文法事項の分布にも存するのだ、ということである。

ともかくも、筆者の作成した図2と馬瀬氏の「早く(来た)」の分布図とを長野県域について比較してみると、分布がほぼ重なっていると言える。もちろん、馬瀬氏の調査密度は、筆者のに比べるべくもないほどに精密である。それについて敬意を表した上で、ウ音便の分布領域を眺めるとき、筆者の場合には、次の地点で「ハヨー」が見られた。

- 岡谷市塚間町
- 木曾郡開田村把ノ沢
- 木曾郡南木曾町読書
- 下伊那郡天竜村平岡

これら4地点を線で結んだ4角形の内側、および周辺に、馬瀬氏の「ハヨー、ハヨ」の分布も収まっている。上記4地点の枠の中、つまり、長野県中南部に「ハヨー」の分布が、まばらに認められる、ということができよう。

次に、明治の国語調査委員会の「口語法分布図」以来、分布が複雑に揺れている愛知県地方のウ音便の状況について考えてみよう。

三、愛知県地方方言における「暖かく」(形容詞連用形)の分布

愛知県地方では、「寒い」と「暑い」との中間の「暖かい」を言い表すときに、「暖かい」をほとんど使わず、「温たい、温たい」で済みます。「ヌクトイ、ヌクタイ」は、気温の適当であることを表現するものである。西日本や中国地方では、「ヌクイ(温い)」と言うが、愛知県地方ではそれを、「ヌクトイ、ヌクタイ」の如く、語中に「ト」「タ」を挿入して、特異な語性を醸成させている。

(一) 老年層図

さて、図3(老年層図)を見ると、「ヌクトー」が三重県沿岸、尾張、岐阜県側、西三河の北部に見られる。また、新城市上平井、静岡県周智郡森町森にも、「ヌクトー」が飛び火的に分布している。「アツタコ」は、一地点にしか見えない。愛知県地方では、「アツタカイ(暖かい)」が生活語として十分には定着していないので、「アツタコー」などの音便形を産んでいないのであろうか。換言すれば、それは、「ヌクトイ」「ヌクタイ」を使用することが著しいことの証明でもある。

「ヌクトー」のような形容詞連用形が、愛知県地方で、どのように行われているかを、具体的な文例に即して考えてみる。

○ヌクト ナツテ キタ トキダ。暖かくなってきた時のことだ。老女→筆者。愛知県知多郡南知多町篠島, 1976。

○タコ セナ イカン ノカナー。ココワ ビクセナ イカン ノカナー。高くしなくてはいけないのかなあ。こは、低くしなくてはいけないのかなあ。老女→筆者。愛知県知多郡美浜町河和宇北屋敷, 1967。

「ヌクトー」でなくて「ヌクト」となっている。「タコー」でなくて、「タコ」になっている。短呼形になりがちなのが、尾張知多地方の形容詞連用形ウ音便の一特色である。

○アシター スズショー シテァー ナー。明日は涼しい日にしたいものだねえ。老女→老女。名古屋市緑区鳴海町, 1967。

○オモショー ネー モン。おもしろくないもの。少男→少男。愛知県知多郡南知多町篠島, 1967。

「スズショー」、「オモショー」は合音の音相を見せる形容詞の一例である。老年層か少年層かを問わず、これの行われているのが注目される。尾張の知多半島方面で、特にこの現象が盛んである。

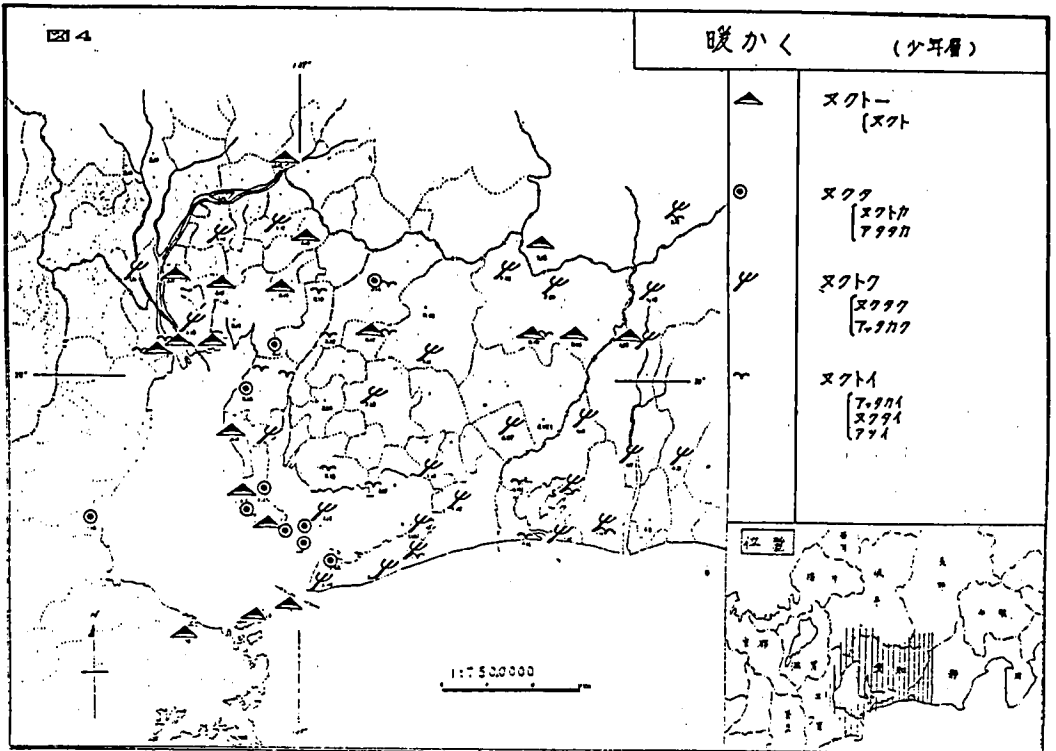
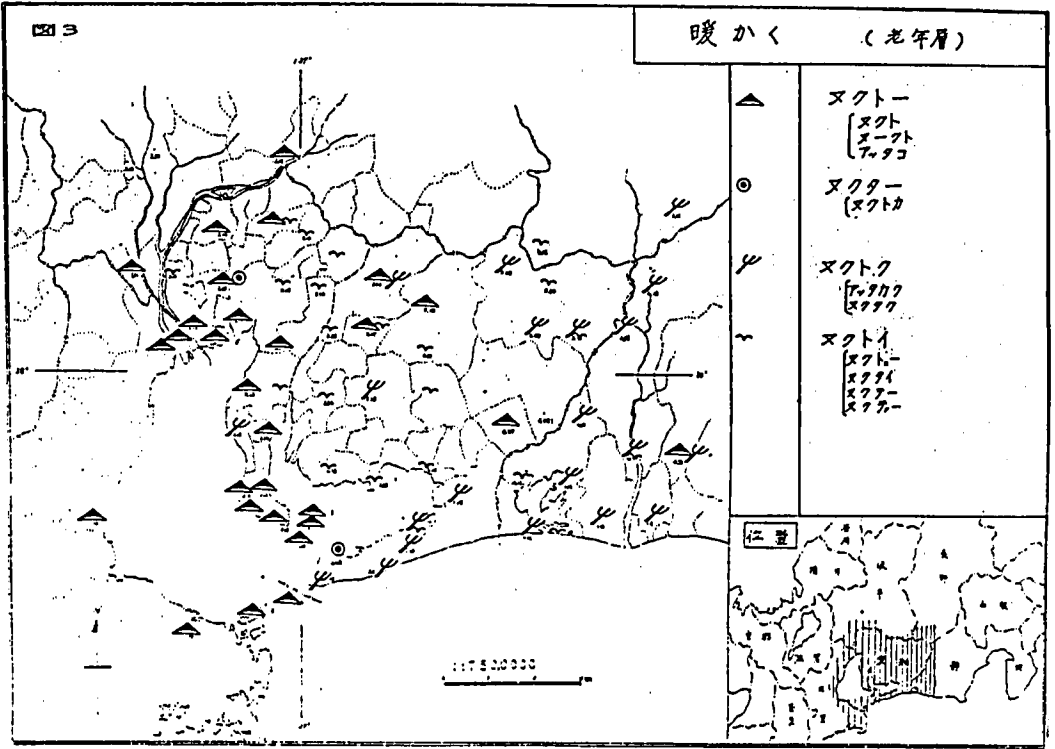
また、次の例

○オモシロ ナイモンデ……。面白くないから……。少女→少女。愛知県知多郡知多町岡田, 1967。

のように、ウ音便の短呼も、上述の如く、年層を超えて聞かれる。

さて次に、ウ音便化しない状態の「ヌクトク」の分布を見てみる。「ヌクトク」は、静岡県内に広く分布し、東三河にも行きわたっている。ただし、尾張地方や東三河では、「ヌクトク」の分布はきわめて少なくなっている。

先に「口語法分布図」を見たとき、西三河に「広く」



「広」の併存分布に注目したが、1966年～1967年の筆者の調査では、その併存分布が目立たなくなっていた。分布に若干の動きがあった。「広」などの「ク」語尾が減って、他の形に転じているのである。

しかしながら、三河地方では、「ヌクトク」などの「ク」語尾による（または「シク」語尾の）形容詞連用形が主要なものであり、尾張地方の「ウ」語尾（「ヌクトー」）と対応していることは事実である。

渥美半島には、次のような例が見える。これらは、みな「ク」語尾（「シク」語尾も）の用例である。

- オドナシク シテケツカヤ エーガ ノー。孫がおとなしくしていればいいけれどねえ。老男→筆者。愛知県渥美郡渥美町大字伊良湖、1967。
- カミサンワ サブシク ナック。神信仰はさみしくなった。老男→筆者。同上。
- チューニ ウイタゲーナ。ウレシクテ。宙に浮いたようだ。うれしくて。中男→中男。愛知県渥美郡田原町浦、1967。
- ヒャクショーワ ホン スクナクテ……。百姓はごく少なくて……。老男→筆者。愛知県渥美郡赤羽根町赤羽根、1967。
- 渥美湾内にある島嶼でも、「ク」語尾が見える。
- キモチガ ツオクテ……。気持ちが強くて……。老男→筆者。愛知県知多郡南知多町篠島、1967。
- 東三河の中心都市が豊橋市である。そこにも、「ク」語尾が見える。
- スケナク ナッテ ネー。家にゆっくりしている人が少なくなってねえ。老女→筆者。豊橋市中世古町、1967。
- マー チト ヤルト ニクラシク ナル。（孫が）もう少し（わるさを）すると、憎らしくなる。老女→筆者。同上。
- 渥美湾の沿岸の諸地点にも、「ク」語尾が盛んである。
- ヤスクテ ウマイ ゾン。安くておいしいよ。老女→筆者。愛知県蒲郡市西浦町北稻生、1968。
- ムカシャー スクナクテ ヨカッタ。エライ コ下ダ ゾン。昔は少なくてよかった。たいへなことだよ。老女→筆者。愛知県宝飯郡御津町下佐脇、1968。
- コンキクテ ションネー。息苦しくて仕方がない。老女教示、同上。

このように、ウ音便化しない例をたくさん掲げて、「ク」語尾、「シク」語尾のままで、形容詞連用形が三河地方で根強く行われていることを、記した。

次に、「ヌクター、ヌクタ」が尾張名古屋地方の1地と、離れて渥美半島の先端近くとに見えるのが注目される。「ヌクター（ない）」のように使われて、「ぬ

くたくは」の「くは」が省略された形と考えられる。これは、少年層図（図4）で著しく多くなるので、少年層図の解釈の中で一括して説明する。

（二）少年層図

図4の「暖かく」の少年層図を見れば、「ヌクトー」の分布が知多半島で少なくなっていることに気付く。その代わりに、「ヌクタ」という独特の形が増えている。

「ヌクトー」の分布が、東三河の奥、即ち奥三河で拡大している。北部地方では特に、ウ音便が好まれて、老年層で分布していなかった所にさえ、少年層ではそれが見える。ウ音便は、地図で表した対象地域においては、少年層においても、受容され易い音声現象なのであろう。

もう一つ、少年層では、「ヌクトク」のような「ク」語尾が、全域にわたって増えていることも、指摘しておかねばならない。「アツカク」でなくて、「ヌクトク」であるところに、もう一つの特異性はあるが、共通語的な音声相をも、取り込んできているのである。

更に、最も注意したいのは、「ヌクタ（ない）」などの言い方である。「ヌクタ（ない）」は、「ぬくた くは ない」から生じたか。「ぬくた く ない」から生じたものか。そのいずれかであろう。また、「ヌクタカ（ない）」は、「ぬくた くは ない」が、「ぬくた か ない」へと変化したものと解される。kuwa > ka の変化である。

これと同様の原理で、「ヌクタカ」は、「ぬくとくは」の「くは」が「か」に転じたものと解することができる。

／nukutokuwanai／>／nukutokanai／

この音韻変化は、日本の各地に、しばしば見られるものであり、珍しくない。

この／kuwa／>／ka／の現象が、知多半島を隆盛の中心地として、広く渥美半島やその他の周辺部にも伝播していることが分かる。その用例は、以下のよう

- に豊富である。
- 名古屋市でも、年層にかぎらず行われている。
- タカ ネアー キヤーモ。高くないかね？老女→少男，教示。名古屋市市中川区，1966。
- 三河沿岸地での例は、次のようである。
- アサ メーメーシチャウト ハイ ヨカナイ ジャン。朝、騒がしくしてしまうと、もう、良くないね。中女→老女。愛知県宝飯郡御津町御馬，1968。
- ナンダー ノ。トラナ ヨカナイ。何だい。あれは、取らなければよくない。老女→老女。同上。

豊橋市での例を見よう

○イキタカナイケド……。行きたくないけれど……。
青女→青女。豊橋市瓦町通り，1967。

○ウルサカナイ。うるさくない。青女→青女。同上。
今度は、渥美半島での例を掲げてみる。

○チットモ オソガカナカッタ。少しも恐ろしくな
かった。中男→中女。愛知県渥美郡田原町浦，1967。

○イキタカナイ。行きたくない。中女→中女。愛知
県渥美郡赤羽根町赤羽根，1965。

このように、形容詞連用形の語尾が/a/母音で終
わるのは、特異としなければならない。主に沿岸、半
島地域において、盛んであり、今後も広がり榮えてい
く現象であろうと思われる。

ところで、「ヌクトー」対「ヌクトク」の東西対立
の分布は、愛知県地方域において、当分の間、このま
まの状態が続いていくものと予想される。

○ おわりに

以上、中部地方域における「早く」を中心とした形
容詞連用形のウ音便について、その分布状況とそれに
関する諸問題とについて考察した。すでに述べて来
たったことではあるが、考察の中で明らかにしえた点
を箇条書きにすれば、次の通りである。

- ① 「ハヤク」と「ハヨー」との対立分布は、大局
的には、明治39年の「口語法分布図」および、「口
語法調査報告書(下)」の記述に合致する。しかし、
愛知県域においては、若干の相違が見られる。
- ② 「ハヨー」の分布の方が、「ハヤク」の分布よ
りも古い。しかし、「ハヨー」は、中部地方で、
分布を拡大しつつある。
- ③ 明治以来、形容詞連用形(ウ音便)の分布領域
は、中部地方域において、あまり変動していない。
- ④ 形容詞のウ音便は、厳密には東西日本の対立を
立証する事項とは言えないが、新潟東境と豊橋を
結ぶ線を仮定して、その西側に主に分布すると
言っておこう。
- ⑤ かつて「口語法分布図」で、「白く、白う」の
併存分布を見せた愛知県中南部地域には、現在、
ウ音便(早う)の単存分布が目立つ。
- ⑥ 老少年層において、ウ音便に、大きな分布の変
容は見られない。ただし、「ヌクタ(ヌクトカ、
アタタカ)(ない)」の方言的発音、つまり/a/

語尾が、ウ語尾とク語尾の中間地帯で、隆盛になっ
てきている。

(1987. 9. 6)

〔付 記〕

1. 西日本の各地で、「ハヨー」の如きウ音便が聞
かれ、東日本で「ハヤク」「ハヤ」が行われている
ことは、多くの辞書類にも記されている。ただし、
辞書類は、共通語と同じであれば省略されることが
多いので、「ハヤク」「はや」の登載は、き
わめて稀である。

ハヨ(鹿谷典史『神戸方言集』昭51、渡辺之夫・
佐藤八重子『大分県方言集成』昭54、嶋戸貞良『鹿
児島方言辞典』昭49、神坂次郎『紀州の方言』昭
45、新藤正雄『大和方言集』昭26)、ハヤ(神部
宏泰『隠岐方言の研究』昭53、館野清『魚沼地方
方言集』昭57、龍川清・佐藤忠彦『会津方言辞典』
昭58)

ウ音便の西日本地方域での存立は、著しいもの
であると言うことができる。

2. 中部地方に隣接する近畿諸県と関東諸県につ
いて、その若干の地点を、1987年に調査して、参
考とした。調査した県は、群馬県、埼玉県、神奈
川県、京都府、滋賀県、三重県である。言語地図
上には、2種類の資料が押印してあることになる。

〔参考文献〕

- 国語調査委員会編『口語法調査報告書(上)(下)』(明
治39年12月原本発行、昭和61年11月復刊、国書刊行
会)
同上『口語法分布図』(明治39年12月原本発行、昭和
61年11月復刊、国書刊行会)
ロドリゲス著、土井忠生訳注『日本大文典』(昭和30
年3月、三省堂)
牛山初男著『東西方言の境界』(昭和44年3月、信濃
印刷)
馬瀬良雄著『信州の方言』(昭和46年7月、第一法規)
佐藤虎男著『音便形から見た大阪弁の動態』(『関西方
言の動態に関する社会言語学的研究』昭和62年、文
部省科学研究費研究成果報告書)